

Vol.8

下関市立大学 資料室だより

●発刊/2019.3.31 ●発行/下関市立大学附属地域共創センター



海峡の英知。未来へ そして世界へ。

公立大学法人

下関市立大学

Shimonoseki City University

〒751-8510

山口県下関市大学町二丁目1番1号

TEL.083-254-8613

FAX.083-253-1622

<https://www.shimonoseki-cu.ac.jp>

E-mail : chiikikyoso@shimonoseki-cu.ac.jp

資料室だより巻頭言

下関市立大学附属地域共創センター
センター長 濱田 英嗣

2018年12月26日、菅義偉官房長官は定例の記者会見において、日本が国際捕鯨委員会(IWC)から脱退し、日本の領海と排他的経済水域(EEZ)で商業捕鯨を2019年7月から再開することを発表した。この決定にアングロサクソン系国家が猛反発しているほか、日本国内にも「脱退は拙速」との意見が少なからずあり、政府によるIWC脱退宣言は必ずしも好意的に受け止められていない。ここでその是非を判断することは極めて難しい。この脱退が国家にどのようなメリット、デメリットをもたらすか、現在進行中の外交事案や2020年開催予定の東京オリンピックへの悪影響を懸念する識者もあり、もう少し時間経過を経ないと評価が下せない、これが実態であろう。

私見によれば、日本が主張している鯨資源の持続的維持管理原則に沿って、適性に鯨を食料として捕獲することに誤りはないと思う。かつての途上国の所得水準が向上し、地球上の食料資源が十分確保できる保証がない以上、アングロサクソン系が主張する「食料としてのクジラ利用は許さない」は、行き過ぎた介入だろう。

いずれにしろ、IWC脱退で鯨問題は新たな局面に入った。心配なのは、商業捕鯨再開から今後の産業発展の見取り図が示されていないことである。縮小している国内鯨市場をどう活性化するのか、商品の品質向上、低価格販売さらに食用以外での商品化政策など、早急に手を打つ必要があるのではないか。日本としてのIWC脱退を鯨のまち下関の公立大学の鯨資料室としてどう受け止めるか、今後の鯨資料室のあり方に関して、(一財)日本鯨類研究所と組織としての連携強化等を含め、再検討の段階に入ったと思う。

新着資料紹介

新しく資料室に寄贈された資料を紹介します。

「中部幾次郎揮毫書画」、「鯨のヒゲで作成したコースター」、「韓国公船に依る被拿捕漁船乗組員名簿」及び「羽衣丸乗組員名簿」です。寄贈していただいた方々に感謝します。



中部幾次郎揮毫書画



鯨ヒゲで作成したコースター 羽衣丸乗組員名簿
韓国公船に依る被拿捕漁船乗組員名簿

7月28日、8月11日 『下関くじらサマースクール』を開催しました!!

下関市内在住の小学生約20名と保護者の方に「下関とくじらの歴史」や「くじらの生態等」について学んでいただくとともに鯨資料室の見学を行っていただきました。

下関くじらサマースクールは、本学としては初めての取り組みで、くじらのまち下関ならではのものです。



下関くじらサマースクールの様子

「資料室研究「鯨のまち・北海道網走市の過去・現在・未来を辿る —北西太平洋鯨類科学調査と小型沿岸捕鯨等を通して—」

—調査中間報告—

下関市立大学附属地域共創センター
委嘱研究員 岸本 充弘

1 はじめに

北海道網走市は、北海道オホーツク総合振興局管内のオホーツク海に面した人口約3万6千人の街(写真①能取岬、写真②帽子岩)で、豊かな水産資源等を背景にし、水産業や農業を中心につけてきた。明治以降近代捕鯨会社の事業場が設置され、現在は、日本最北端の小型沿岸捕鯨基地でもある。また、2017(平成29)年度から北西太平洋鯨類科学調査沿岸調査(網走沖)が開始され、網走市はその調査基地ともなっている。一方、2018(平成30)年12月26日に日本政府は国際捕鯨委員会(IWC、以下「IWC」)からの脱退を決定し、翌年7月からの領海内及び排他的経済水域(EEZ)内での商業捕鯨再開を行うことを官房長官談話として表明した。そこで筆者は、鯨のまち・網走市の捕鯨の歴史を辿るとともに、北西太平洋鯨類科学調査が開始され、更にIWC脱退後の商業捕鯨再開を見据え、網走市の現状や鯨のまちとしての取り組みについて、資料調査や関係者への聞き取りをしながら、将来へ向けてのまちづくりの方向等について検証することを試みた。今回その調査を実施するため、下関市立大学附属地域共創センターの助成を受け、2018(平成30)年8月に網走市での北西太平洋鯨類



写真①



写真②



写真③ 科学調査の現場での調査、水産庁、網走市役所(写真③)等へのヒアリングや、先行研究・関連資料調査等を行っているが、この紙面をお借りして資料室研究の中間報告を行うこととした。

2. 鯨のまち・北海道網走市の捕鯨の歴史を辿る

北海道では3世紀頃からアイヌ文化期にかけ、鯨類は食糧として、また鯨骨は道具類の原材料として利用されており、5~9世紀にかけオホーツク海沿岸に広がっていたオホーツク文化には、鯨の骨を意図的に集めた「鯨塚」の存在もある。北海道の先住民であるアイヌにとって、鯨はカムイ、いわゆる精霊、神ではなく、海で一番高いレブンカムイいわゆる沖の精霊であるシャチが授けてくれる食料と考えられていた。また、アイヌの捕鯨は道南の噴火湾岸を除いて一般的ではなかったようだが、肉は食用、鯨ヒゲは樺太アイヌにより、犬ぞりの滑走板として利用されていた形跡がある。

一方、国指定史跡の網走市モヨロ貝塚では今から1300年前の古墳時代、北海道の縄繩文文化の足跡を辿ることができ、モヨロ貝塚館(写真④)によれば、当時の出土品から推察すると、この地域で鯨漁をやっていた可能性があるという。モヨロ貝塚の遺物にある固定鈎頭は鯨骨で作られており、また、骨臼、鯨の脊椎骨を利用した臼や、大型の鯨骨を板状に加工したもの、また、骨牙偶、人偶等として、マッコウ鯨の歯で作った婦人像も出土している。



写真④

その後北海道での捕鯨に関する記録は江戸時代まで下り、後幕府直轄時代に北海岸が舞台となる。この頃既に、日本沿岸での古式捕鯨が米国帆船式捕鯨のジャパングラウンド進出の影響による鯨の減少で衰退し始めていたが、当時の欧米人を日本近海へ引き付けていたのが北洋周辺の鯨であり、その基地として北海岸が重視されていた。1866(慶応2)年に捕鯨技術習得希望者に対し函館入港の外国船へ乗組むことへの許可を行い、水野土佐守も蝦夷地での捕鯨事業を計画したが、実現しなかった。幕末期では、蝦夷地の寄り鯨が函館奉行、場所請負人、アイヌに三等分され油や塩漬肉に加工されていたが、幕府は1799(寛政11)年松前藩の影響下にあった東蝦夷地を直接支配し、捕鯨もエトロフ島で鯨組を設置しようとしたが費用の面から実施に至らなかった。その後、1854(嘉永7)年に函館は開港され、入港の捕鯨船から捕鯨技術を学んだが本格的に捕鯨を行う前に明治維新となる。明治維新後も、山口藩が増毛郡と留萌郡でアメリカ技術の捕鯨を試みたりしたが、地元漁民との軋轢から成功に至らなく、石川県出身の齊藤知一が1886(明治19)年に羽幌で捕鯨を実施し、ようやく北海道における捕鯨が始まる事となる。

我が国の近代式捕鯨は、1899(明治32)年に山口県の岡十郎等により日本遠洋漁業が創立され汽船によるノルウェー式捕鯨により開始されたが、1909(明治42)年に鯨類繁殖保護のため鯨漁取締規則が制定され、許可船数を30隻以内に限定していた。日本遠洋漁業は、その後合併再編され東洋捕鯨となったが、新たな資源を求めて大正元年に北海道に進出し、室蘭を根拠として事業を開始するとともに、1915(大正4)年5月に網走ニツ岩海岸北側にあるタンネシラリに事業場を増設し、オホーツク海の捕鯨に乗り出した。オホーツク海にはクジラの回遊が多く、1899(明治32)年などは網走付近だけで7月中に2頭も寄鯨があったという。同じく1915(大正4)年、大日本水産(本社東京)も網走に捕鯨根拠地を建設する計画で網走漁業組合に了解を求める組合では総代会を開いて異議ない旨回答しているが、事業着手には至らなかった。東洋捕鯨では宗谷岬から知床岬沖合一帯を操業区域とし、捕獲1頭につき5円を漁業組合に寄付するという契約であったが、初年は鯨群根拠の探鯨に時日を費やしたため捕獲31頭にすぎなかった。翌1916(大正5)年は5月下旬から操業を開始、約100日間で長須鯨127頭、座頭鯨4頭の131頭を捕獲し、価額約10万円という好成績をあげた。しかし1917(大正6)年は振るわず長須41頭、イワシ2頭の43頭にとどまった。当時は鯨食が十分に普及していなかったため肥料粕とし油をとて移出し、一部を塩蔵していたが、製肥・採油事業は地元の業者に請け負わせ、解体作業には見物客が押し寄せ絵葉書まで発売される有様であったという。またヒゲは地元商店で細工され、北見名物として売り出されていた。1918(大正7)年の統計によると網走町の漁獲高はクジラが24万8千貫(約930トン)総量の半ばを占め、その価額は2万4千円でニシンとほぼ同額となっている。また製造水産物では鯨粕と油を合わせて4万6千円、塩サケの4万3千円を上回り第1位となり、町としても大きな期待を寄せていましたが、捕鯨会社が根室方面に主力を移すことになり、網走根拠の操業は1918(大正7)年をもって中断、再開は網走築港の完成した1930(昭和5)年からとなる。

その後、日本水産捕鯨部では1931(昭和6)年から網走での事業を再開、初年度は53頭の捕獲があったが、年々捕獲頭数が減少し、1935(昭和10)年をもって事業を休止した。網走港には、1931(昭和6)年にタンネシラリから移転した際の捕鯨基地跡の碑がある(写



写真⑤

表1 水産製造物（昭和9年）網走支庁管内道庁統計書

種類	内訳	数量(貫)	価額(円)
肥料	ニシン粕	363,461	126,702
	イワシ粕	456	110
	タラ粕	13,970	3,903
	クジラ粕	720	216
	カレイ粕	11,160	3,936
	荒粕	5,952	1,457
	スケトウ粕	1,800	540
	その他	240,692	39,975
小計		638,211	176,839
種類	内訳	数量(貫)	価額(円)
魚油	イワシ油	19	7
	ニシン油	27,862	10,991
	タラ油	3,005	1,311
	クジラ油	710	355
	サメ油	19,909	7,347
	その他	3,322	1,235
小計		54,827	21,246

出所：網走市史下巻1241頁から作成

真⑤）。一方、水産製造物（昭和9年）網走支庁管内道庁統計書（表1）によれば、当時は肥料としてクジラ粕が720貫（約2.7トン）、価額216円で、また魚油の原料としてクジラ油も710貫（約2.67トン）、価額355円分が製造されており、少ないながらも他の水産物と並んで、肥料や魚油の原料として鯨が使用されていた。戦時下では食肉・皮革資源増産が要請され、日水では1940（昭和15）年網走工場を開設、初年度30頭・10万円を目標に操業を開始し、抹香鯨13頭、ヒゲ鯨17頭、計30頭を捕獲した。鯨肉は大阪市場へ送られ肉はもちろん、皮は皮革代用品として、油・骨は肥料として利用された。また戦時中の食肉・皮革不足を反映し、網走ではイルカ、アザラシなどの捕獲も盛んで、食糧として捕獲されていた記録もある。また、網走では戦前、捕鯨税という税金があった。1932（昭和7）年網走町長宛ての申告書の中で「六月七日長須一頭、漁場網走北東23哩、右申告候也」とあり、地方税48円、町税28円80銭でナガスクジラ1頭捕ると76円80銭が納付され、1941（昭和16）年からは「鯨1頭につき80円」となっている。

戦後は日本の食糧危機と世界的な油脂不足の緩和から、いち早く占領軍が許可した漁業が捕鯨であった。食糧難を受け、網走でも捕鯨が行われており、1947（昭和22）年5月23日付あばしり新聞では、「南水洋から網走沖へ勇壮な捕鯨船、いよいよこれから展開」との見出いで、「6月から大型捕鯨船7隻が集結、総員300名近くの大集団で七、八十尺もある長須大鯨の捕獲に豪壮な大絵巻がくり広げられる。網走で捕獲鯨の種類はミンク、シャチ、槍鯨、長須の4種、ミンクは1頭3万円、長須は30万円。」とある。また、網走では1950（昭和25）年に7企

業が操業していたが、大手捕鯨会社は撤収し、現在は小型捕鯨業者2社が操業を続けている。主要漁業種別漁獲状況（表2）及び主要魚種別漁獲高（表3）によれば、1955（昭和30）年には鯨が1719トン、金額にして約1億3千万円の漁獲量があり、漁獲量ではかれいやさけ、金額では、ほっけに引けをとらないものであったが、年を追うごとに漁獲量や金額は減少していく。

網走は、前述したとおり、函館市、鮭川町（石巻市）、和田浦（南房総市）、太地町等と並ぶ国内の小型沿岸捕鯨基地の1つであり、市内にある三好捕鯨は1953（昭和28）年、下道水産は1969（昭和44）年に操業を始め、近年では小型沿岸捕鯨で捕獲されるツチクジラはこの2社が2頭ずつ、年間4頭が、網走に陸揚げされている（写真⑥：網走港にある引揚スロープ）。2社は北西太平洋鯨類科学調査の沿岸調査にも一般社団法人地域捕鯨推進協会の一員として従事し、下道水産は道内の業者に委託して大和煮の缶詰も製造しており、鯨のまち・網走を支えてきた。



写真⑥

一方、網走では、2017（平成29）年6月から、新北西太平洋鯨類科学調査計画（NEWREP -NP）に基づく科学調査が行われており、日本沿岸域におけるミンククジラのより精緻な捕獲枠算出を目的に、オホーツク海において、2017年度～2028年度の12年間でミンククジラの捕獲調査（当初6年間は年47頭、後半6年間の捕獲頭数は前半の結果を踏まえて再計算される）を行うこととなっている。また、2014（平成26）年3月31日の国際司法裁判所の判決を受け、より科学調査に重点を置いた調査内容となっており、非致死的調査や資源量推定のための目視調査、移動を追跡するための衛星標識の装着の試行的実施、バイオプシー（皮膚標本）から抽出したDNAの分析による年齢推定方法（耳垢栓の分析の代替手法）の実行可能性・有用性の検証等について、沿岸小型捕鯨船5隻により実施されている。北西太平洋鯨類科学調査のオホーツク海側沿岸域調査について、水産庁捕鯨室によれば、「網走で調査を実施することになった背景として、網走沖ではミンククジラの2つの繁殖集団（J系群及びO系群）が混在しており、その混合率と年齢情報の両方を得ることで、より安全なミンククジラ捕獲枠の算出が可能となることから、網走沖で調査を新たに行うことになったものである。加えて、網走が歴史的に捕鯨の基地であったことや、現在もツチクジラが水揚げされていることから、実施されることになった。」とのことであった。

平成30年度北西太平洋鯨類科学調査（オホーツク海側沿岸域調

表2 主要漁業種別漁獲状況（市水産統計30年史）

漁業種別	昭和30年		昭和35年		昭和40年		昭和45年		昭和50年		昭和52年	
	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)
機船底曳漁業	54,375	638,981	46,506	659,714	31,297	884,085	75,860	1,409,633	122,613	2,882,025	94,086	7,060,953
定置網漁業	2,673	278,305	1,681	309,785	972	284,416	1,205	554,785	2,690	1,484,374	1,623	1,615,748
延縄漁業	4,467	71,344	3,029	66,819	3,208	94,003	1,231	151,899	2,461	549,050	1,783	650,503
刺網漁業	111	3,651	46	610	239	8,628	2,804	85,526	296	79,483	290	96,289
さんま棒受網漁業	2,436	32,169	3,467	48,561	1,532	57,838	1,399	232,898	5,685	190,107	21,145	1,794,650
捕鯨	1,719	130,824	556	29,594	612	23,886	347	33,960	154	102,787	111	112,666
その他漁業	1,476	24,696	4,838	65,282	23,885	806,252	1,084	177,042	91	3,349	3,349	531,798
海面漁業計	67,257	1,179,970	60,123	1,180,365	61,745	2,159,108	83,930	2,645,743	133,990	5,347,860	122,387	11,862,607

出所：『新網走小史』網走市総務部、1987年、272～273頁から作成

表3 主要魚種別漁獲高（市水産統計30年史）

漁業種別	昭和30年		昭和35年		昭和40年		昭和45年		昭和50年		昭和52年	
	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)	漁獲量(屯)	金額(千円)
すけとうだら	29,709	355,403	20,923	245,149	19,184	493,545	57,148	784,319	86,593	1,591,101	67,543	5,702,551
ほっけ	18,618	152,367	18,522	284,683	4,685	156,360	8,687	168,342	8,041	203,627	15,253	532,668
かれい	1,763	33,457	2,483	43,754	4,552	104,844	2,476	124,536	2,270	248,206	1,820	403,820
さけ	1,345	249,855	901	288,518	734	262,444	986	514,809	1,543	1,336,187	1,539	1,581,983
さんま	3,768	32,169	3,505	49,143	1,536	57,977	1,401	233,213	5,685	190,107	21,145	1,794,650
くじら	1,719	130,824	556	29,594	612	23,886	347	33,960	154	102,787	111	112,666
その他	7,181	121,763	5,366	78,320	3,220	114,651	-	-	-	-	-	-
海面漁業計	67,257	1,179,970	60,123	1,180,365	61,745	2,159,108	83,930	2,645,743	133,990	5,347,860	122,387	11,862,607

出所：『新網走小史』網走市総務部、1987年、274～275頁から作成

査)は、2018(平成30)年8月30日に終了し、翌31日付水産庁プレスリリースによれば、調査期間は平成30年8月1日～8月30日の30日間で、標本採集船5隻により、ミンククジラ47頭(雄16頭、雌31頭)が捕獲された。また、目視調査による発見頭数はミンククジラ91群93頭、ナガスクジラ114群163頭、ザトウクジラ1群1頭、ツチクジラ11群95頭、シャチ8群32頭などであった。今回の調査で得られたデータは、太平洋側沿岸域調査、沖合域調査と合わせ、詳細な分析を行った上で、IWC科学委員会に報告されるなど、北西太平洋における鯨類資源の保存及び管理に資する科学的知見の蓄積・増進に役立てられるという。筆者が網走を訪れた2018(平成30)年8月22日から8月24日の間は、折からの台風の荒天のため8月23日のみ調査船が出航できたが、その日、体長7mを越える雌のミンククジラが捕獲できたとの連絡があり、網走港での渡鯨(写真⑦)から調査(写真⑧)、その後の解体等について見学させていただくことができた。捕獲された個体は妊娠個体ではなかったが、胃からは真新しい溶解前の多数のイワシを見ることができ、プランクトンやオキアミを主食とするヒゲクジラが多く魚を摂取する現状を、改めて確認することができた。捕獲されたミンククジラの副産物は網走市内のスーパーで「網走沖産ミンククジラ(生)」特設コーナーで販売され(写真⑨)、多くの市民の方が網走産鯨肉を購入する姿が見られた。2018(平成30)年12月26日に日本政府は官房長官談話として、IWCからの脱退と、領海及び排他的経済水域(EEZ)内での翌年7月からの商業捕鯨再開を表明した。このことが今後の網走を含む日本の捕鯨の大きな転機となるのは間違いない。

網走では鯨の尾羽を食べるなど従前から鯨食文化が定着しており、1950～60年代は非常によく食べられていたという。また、現在もよく食べられている、すまし仕立てのくじら汁や鯨の竜田揚げは、網走の郷土の味ともいえるものである。それでは、鯨のまち・網走では、鯨の普及啓発等を目的にどのような鯨事業に取り組んできたのであろうか。網走市水産漁港課によれば、網走の鯨事業の中心を担っているの



写真⑦



写真⑧



写真⑨

は、網走市長が会長を務める網走くじら協議会で、いわゆる商業捕鯨一時停止後の1993(平成5)年2月に網走市と三好捕鯨、下道水産の市内小型捕鯨3者で組織され、捕鯨や鯨食文化の普及継承に関する活動(くじら学校給食や市内イベントでの鯨肉販売など)を行ってきてている。特に市内全小中学校でのくじら学校給食は1993年からスタートし、これまで18回実施している。

網走市民の方の鯨を食べる機会について同課では、「2017(平成29)年度から網走沖で調査が始まり、網走産の調査副産物が市内に流通したこと、鮎川、釧路産と併せて生の鯨肉を食べる機会が以前より増えている。網走での調査期間中、市内の小売店で「特設コーナー」を設けているところもあるし、普段は鯨肉メニューを提供していない飲食店でもメニュー提供される店舗が複数見受けられ、また、調査に関する地元メディア等での報道などもあり市民の鯨肉への関心は網走での調査期間中は特に高いのではないか。」といふ。また、「沿岸調査と連動した特段新たな取り組みを行うわけではないが、昨年市役所やオホーツク総合振興局の食堂で網走産鯨肉を使用した鯨定食を提供いただき好評だった。」といふ。

一方、網走市総合計画(2008(平成20)年～2017(平成29)年)基本計画第3章「にぎわいと活力にあふれるまち水産物販売、水産加工」の中では、「水産物の高次加工や地産地消の取り組みを進め水産物における網走ブランドの定着を目指す」とあり、網走おさかな委員会において網走市における特徴的な水産物であるカラフトマス、スケトウダラ、キンギ、シラウオ、クジラ、シジミ、ワカサギを「活き枠き珍」として選定し、鯨も選ばれている。網走での鯨の取扱い等を統計等の数字でみると、2008(平成20)年版オホーツクの水産・北海道オホーツク総合振興局管内漁業生産の状況によれば、鯨(網走市のみ)は9トン、金額3,211千円で、全体数量51,924トン、全体金額10,287,408千円と比較すると、鯨はオホーツク管内の漁業生産全体数量の約0.02%、金額は0.03%であった。また、平成24年から28年までの主要漁業種別漁獲状況(表4)によれば、沿岸小型捕鯨の漁獲量は平均36トン、生産額は平均約10,692千円で、海面漁業の合計平均漁獲高の約0.07%、平均生産額の約0.09%を占め、また平成24年から平成28年までの主要魚種別漁獲高推移(表5)によれば、鯨の平均漁獲量は平均32.2トン、生産額は平均10,017千円で海面漁業の平均漁獲高の約0.06%、平均生産額の約0.08%を占めている。更に、平成28年魚種別総漁獲高(表6)によれば、オホーツク海が漁獲場所となる海面漁業は漁獲量が37,171.0トン、生産額が106億2,875万円となり、そのうち捕鯨業者の取扱額は約0.1億円であった。IWCの脱退という大きな転機を迎えた今後の網走の取り組みを含めて、この続きは資料室研究で詳細を掲載したいと思う。

表4 主要漁業種別漁獲状況(平成24～28年)

漁業種別	平成24年		平成25年		平成26年		平成27年		平成28年	
	漁獲量(㌧)	生産額(千円)								
機船底曳漁業	27,264.8	1,592,358	21,703.3	1,882,731	18,735.4	1,854,947	19,345.9	1,986,334	16,106.8	1,486,261
定置網漁業	14,159.0	6,578,505	15,679.0	6,786,599	9,223.2	4,353,063	8,909.0	4,510,858	9,693.6	5,014,831
延縄漁業	568.1	807,635	468.1	769,908	712.9	861,557	572.2	805,948	534.5	753,669
刺網漁業	646.3	314,077	708.8	356,021	343.3	282,154	453.4	352,575	504.5	415,296
ほたて桁網漁業	12,946.2	1,373,092	16,872.0	2,778,326	15,797.2	2,438,102	13,260.4	2,793,273	6,838.0	1,782,173
沿岸小型捕鯨	40.0	14,680	39.0	10,800	39.0	10,800	39.0	10,800	23.0	6,381
その他漁業	4,054.5	1,043,408	3,108.4	1,020,170	2,945.0	992,724	3,582.6	1,151,665	3,470.6	1,170,137
海面漁業計	59,678.8	11,723,754	58,578.7	13,604,556	47,795.9	10,793,345	46,162.4	11,611,453	37,171.0	10,628,748

出所:『平成28年版水産統計』網走市、2017年、7頁から作成

表5 主要魚種別漁獲高推移(平成24～28年:5年間)

漁業種別	平成24年		平成25年		平成26年		平成27年		平成28年		5カ年平均	
	漁獲量(㌧)	生産額(千円)	漁獲量(㌧)	生産額(千円)	漁獲量(㌧)	生産額(千円)	漁獲量(㌧)	生産額(千円)	漁獲量(㌧)	生産額(千円)	漁獲量(㌧)	生産額(千円)
すけとうだら	21,245.9	1,068,669	14,606.6	626,370	13,684.9	915,021	16,313.9	1,472,388	12,383.5	1,035,541	15,647.0	1,023,598
ほたて	112,920.8	1,367,753	16,847.6	2,769,564	15,771.8	2,431,137	13,225.4	2,791,165	6,800.1	1,775,410	13,113.1	2,227,006
さけ	13,478.9	6,353,226	14,836.8	6,474,750	8,787.6	4,197,927	8,423.1	4,291,534	6,988.4	4,269,256	10,503.0	5,117,339
いか	819.9	173,143	3,516.2	1,008,749	2,265.3	572,268	511.3	137,292	20.9	12,354	1,426.7	380,761
くじら	41.00	15,520	39.0	10,800	38.0	10,703	20.0	6,682	23.0	6,381	32.2	10,017
その他	5,457.6	1,202,412	5,093.7	1,132,130	4,004.9	1,176,346	5,169.3	1,406,650	4,955.2	1,462,637	4,936.1	1,276,035
海面漁業計	59,678.8	11,723,754	58,578.7	13,604,556	47,795.9	10,793,345	46,162.4	11,611,453	37,171.0	10,628,748	49,877.4	11,672,371

出所:『平成28年版水産統計』網走市、2017年、6頁から作成

表6 平成28年魚種別総漁獲量

漁種名	平成28年		構成比 (%)	
	漁獲量(トン)	生産額(千円)	漁獲量	生産額
すけとうだら	12,383.5	1,035,541	33.3	9.7
さけ	6,988.4	4,269,256	18.8	40.2
ます	2,665.9	743,157	7.2	7.0
ほたて	6,800.1	1,775,410	18.3	16.7
ほたて稚貝	3,257.9	1,004,925	8.8	9.5
くじら	23.0	6,381	0.1	0.1
その他	1,553.4	169,810	4.2	1.6
海面漁業計	37,171.0	10,628,748	100.0	100.0

出所:『平成28年版水産統計』網走市、2017年、3頁から作成

参考文献

- 大場利夫「モヨロ貝塚の出土品」北海道大学、1962年。
 菊池慶一『街にクジラがいた風景 オホーツクの捕鯨文化と庶民の暮らし』寿郎社、2004年。
 児玉作衛門『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会、1948年。
 米村喜男衛『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館、1950年。

『網走市史上巻』網走市役所、1958年。

『網走市史下巻』網走市役所、1971年。

『網走市市政施行50年記念・史跡標注ガイド・網走歴史散歩』網走市教育委員会、1998年。

『網走市総合計画(2008(平成20)年~2017(平成29)年)』基本計画。

『網走タイムズ』連載2005~2006写真で巡る網走今昔物語、第2部写真で巡る網走今昔物語140。

『新網走市水産振興計画』06網走市、2006年。

『新網走小史』網走市総務部、1987年。

『北海道開拓記念館第63回特別展「鯨」図録』北海道開拓記念館、2007年。

『続網走百話』網走市教育委員会、1992年。

2016(平成28)年版水産統計、網走市、2017年。

2008(平成20)年版オホーツクの水産・北海道オホーツク総合振興局管内漁業生産の状況、北海道オホーツク総合振興局、2009年。
 水産庁HP「捕鯨の部屋」資料。

第11回鯨資料室シンポジウムを開催しました!!

下関市立大学附属地域共創センター 委嘱研究員 岸本 充弘

第11回鯨資料室シンポジウム「捕鯨問題になぜ関心が広がらないのか?—森下丈二・国際捕鯨委員会(IWC)日本政府代表と本音で語ろう!—」を開催しました。

平成31年2月9日(土)本学本館I棟206教室で、第11回鯨資料室シンポジウム「捕鯨問題になぜ関心が広がらないのか?—森下丈二・国際捕鯨委員会(IWC)日本政府代表と本音で語ろう!—」を地域共創センター長の濱田教授の司会進行の下、開催しました。暮れも押し迫った昨年12月26日、日本政府は国際捕鯨委員会(IWC)からの脱退と、本年7月からの商業捕鯨再開について官房長官談話として発表しました。本シンポジウムは、捕鯨政策の大きな転換期を迎えてることや、日本政府代表が基調講演を行うということでマスコミの関心も高く、学生や市民、マスコミの方も加えた約130名以上が出席し、会場はほぼ満席の状態で、開会前から大変な熱気に包まれていました。

第1部の基調講演では森下政府代表が「鯨は捕っていいのか?悪いのか?学生に伝えたい捕鯨の話」と題して、捕鯨やIWCの歴史と現状、森下政府代表が議長を務め、昨年ブラジルで開催されたIWCブラジ

会(IWC)日本政府代表と本音で語ろう!—
主催:下関市立大学附属地域共創センター

ル・フロリアノポリス会合での議論や日本政府が脱退に至った経緯、今後の見通し等について、学生にもわかりやすく、穏やかな口調で語りかけるように講演される姿勢が非常に印象的でした。

第2部では、「捕鯨問題になぜ関心が広がらないのか?—森下丈二・国際捕鯨委員会(IWC)日本政府代表と本音で語ろう!—」というテーマで、第1部で基調講演をいただいた森下政府代表に加え、下関市内で唯一の鯨専門料理店の店長として日夜鯨食普及に励んでいらっしゃる小島純子さん、本学の学生で国際商学科1年生の青崎佑希乃さんと吉澤真穂さんの3名を加えた4名のパネリストに、地域共創センター委嘱研究員の当方がコーディネーターを務め、シンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、濱田教授が担当されている地域産業論の受講生81名からの「捕鯨」や「鯨」

に対するアンケート結果を紹介しながら進められました。アンケート結果では、IWC脱退に賛成が53.1%、反対が38.3%、賛成の主な意見として、「文化を守っていくためには、商業捕鯨は必要だから」、「秩序ある鯨産業の発展」を目的としているIWCは、近年その目的から逸脱し形骸化しているから」、「この先日本が捕鯨を続けるつもりなら、加入していくてもこの先捕鯨が容認されることはない」、「日本の外務省は負けっぱなしのイメージだったので」等があげられました。一方、反対の主な意見として、「国際的な協調が必要な中で、悪影響が出てしまうと思う」、「鯨肉の消費量は減っていると知ったので、需要が少ないので、わざわざ脱退してまで捕鯨しなくても良いと思った」、「脱退後のビジョンが不確定であり、不安要素が多いため、脱退すると世界に日本の声が届けられないと思う」等ストレートな多くの意見がありました。また、捕鯨に賛成が85.2%、捕鯨に反対が11.1%で、捕鯨に賛成の主な意見は、「ミンククジラなどが増加しているので、生態系にバランスを考えると捕鯨を行っても大丈夫だと思う」、「そもそも取りすぎているわけではないからやめる必要はない」、「食料安全保障面から鯨を食べる習慣を忘れてはいけないと考える」、「研究面でも文化面でも日本にとって重要なから」でした。捕鯨に反対の主な意見は、「鯨じゃなくても他の魚を食べればいい。もめてまで食べるのじゃないと思う」、「無理して鯨を取って食べる価値がそこまで考えられない」、「数が減ってきていため絶滅してしまうのではないかと思う」というものでした。パネリストからは、ブランド力のある南極産鯨肉が入って来なくなることによる不安や、商業捕鯨という言葉自体のマイナスイメージに対する意見が交わされました。更に会場の学生からも、IWC脱退による対欧米との連携に対する不安等の質問も出され、捕鯨問題に対する関心の高さもうかがわれました。

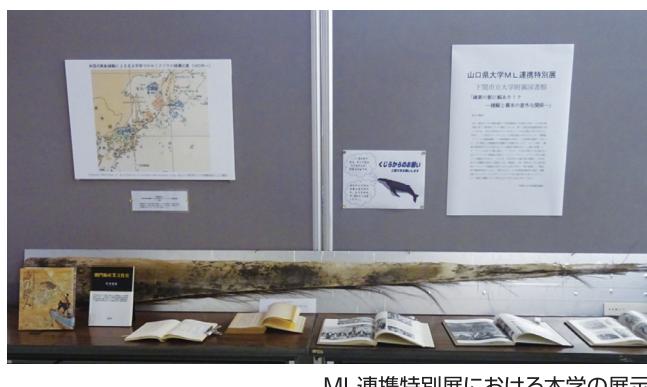
今後も鯨資料室は、捕鯨や鯨のまち下関にかかる情報を収集、調査し、シンポジウム等様々な形で情報発信しながら、地域貢献に努めて参りたいと考えておりますので、ご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。



平成30年度山口県大学ML連携特別展 「維新の影にクジラあり!?～捕鯨と幕末の意外な関係～」を開催しました!!

下関市立大学附属地域共創センター
委嘱研究員 岸本 充弘

平成30年度山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリ)連携特別展が、県内13大学にある博物館及び図書館の17館が参加し開催されました。この事業は、各大学が所有する学術資料・研究成果を学内のみならず地域に広く公開することを目的に開催され、本年度の共通テーマを「ひらく」とし、本学は10月2日(火)から11月30日(金)まで学術センター2階の附属図書館で開催いたしました。本学の特別展タイトルは「維新の影にクジラあり!?～捕鯨と幕末の意外な関係～」で、明治維新のきっかけの1つになった黒船来航の目的が、アメリカの帆船式捕鯨船団に食糧や燃料、水等の物資補給を目的とした寄港地の確保であったことに注目し、維新と捕鯨について考えるきっかけづくりのために、本学鯨資料室の鯨資料や関連の書籍、パネル等の展示を附属図書館と地域共創センターの共同事業で行いました。



ML連携特別展における本学の展示

日本の幕末期に正に全盛期であったアメリカ帆船式捕鯨では、鯨油を搾油することが目的であったことから、主に捕獲対象となつたセミクジラやマッコウクジラに関する展示品として、長さ2mを超えるセミクジラのヒゲやマッコウクジラの歯の実物を展示しました。また、鯨の皮

を帆として使用し、アメリカの捕鯨船をイメージした帆船模型や、アメリカの捕鯨船団がジャパンランドに進出してきた際の、セミクジラ捕獲位置を落とした図面、マッコウクジラを捕獲する様子を描いた絵図の資料も併せて展示・解説することで、来場者の方にアメリカの捕船団と鯨が、我が国から明治維新に与えた影響の大きさを改めて知つていただくことができたのではないかと思っています。また、近代捕鯨発祥地・下関にある本学から、ささやかながら長州藩が主導した明治維新につながる捕鯨についての情報発信ができたことは、大変意義のあることだと考えています。

ML連携事業は、Museum(博物館)とLibrary(図書館)の頭文字をとって名付けられ、平成23年度に活動を開始した山口県内の大学博物館、図書館による広域大学連携展示活動事業で、発足当時は2大学により県内巡回展示活動でスタートましたが、平成28年度には本学も含めて12大学17館が参加、本年度は現行体制となって6周年を迎えました。今回は、県内のML連携事業の特別展を回り設置されているスタンプを集めると粗品がもらえるスタンプラリーも同時開催され、中にはこまめに回ってスタンプを集めて回れる方も見受けられました。

ML連携事業の認知度はまだ十分ではありませんが、図書館と博物館の連携という稀有な取り組みは、新たな可能性を発掘できる興味深い取り組みとなることは間違いないありません。本学の鯨資料室と図書館の連携、融合による地域貢献が、更なる大学発展につながるものと考えておりますので、今後もML連携事業に対し、ご理解、ご協力ををお願いいたします。



鯨の皮を使った工芸品等

多賀正武さんの逝去に寄せて

暮れも押し迫った昨年12月末に、多賀正武さんが逝去されたことを知りました。しかもそのことは鯨資料室シンポジウム案内状を送付した際に判明したことに加え、逝去されたのが1年近く前の昨年1月であったことに、強い衝撃を受けました。多賀さんは、旧林兼造船船舶機関の技術者として多くの捕鯨船建造に携われて来られた方で、本学鯨資料室の各種事業の依頼に、いつも快くお引き受けいただいておりましたが、特に平成26年10月に開催した第7回鯨資料室シンポジウム「下関の鯨産業を辿る～商業捕鯨時代を中心とした公開聞き取り～」では、捕鯨船を建造されたお立場からパネリストとしてご出席いただき、その模様はDVDに収められています。また、旧林兼造船で建造され、現在は解体された捕鯨船第二十五利丸に対しては、多賀さん自身が建造に直接関わられたとのことで、我が子のように懐かしんでおられ、その展示手法等について、お会いするたびに熱く語られておりました。多賀さんは、以前私が下関市水産課に在籍していた際にも「くじら文化発信事業」の一環として市内在住の小学生を対象に行っていた「下関くじらサマースクール」の講師として毎年夏にご協力をいただき、児童の方へ優しく語りかける姿がとても印象的でした。その後、本学鯨資料室の聞き取り調査をお願いしておりましたが、体調を崩されたため、復帰され

てから再度お願いするつもりでおりましたが、忙しさにかまけて連絡をとることを失念していたのが悔やまれます。

この場をお借りして、改めて多賀正武さんの御冥福をお祈りするとともに、本学鯨資料室の発展にご協力いただきましたことに対して厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。（岸本 充弘）



平成26年度鯨資料室シンポジウムにて